

アンリエットとジャンヌ，それぞれの主婦修行

——19世紀フランスの家政書から——（Ⅱ）

末 広 葉 穂 子*

3. 家庭の危機管理

一見すると平和で穏やかに見える家庭生活も，実際には多数の危険と隣り合わせである。住生活の項で触れたような火事などのように，日常生活はその生活そのものを破壊しかねない危機状態に陥る可能性を，常に孕んでいるのである。『家庭の幸せ』では，こうした災いや危機をアンリエットとジャンヌの身近なところで起こる具体的事例として設定して取り上げ，読者の注意を喚起するとともに，どうすれば不幸を避けることができるか，あるいはやむをえずそうした不幸に見舞われたときにどう対処するかについての知恵と手だても述べている。ここで，そのいくつかについて見ていくことにしよう。

病気と事故

家族の誰かが病いに襲われることは，家庭内でもっとも起こりうる可能性の高い災いであると言えよう。アンリエットの父は病いに倒れ，仕事を続けることができなくなり，ついには父と娘の Mareuil への帰郷という結末に至る。これが具体的にどのような病気であるかについては言及されていない。命を危うくするような重い病気ではないが，長年の都会での厳しい労働が，もともと決して頑健ではなかった父の体を徐々に蝕み，すっかり健康をそこねさせてしまったのである。生活を支えるための労働が，逆にその生活を崩壊させることともなる。都市の労働者として働くことに対する著者の否定的意識がここに垣間見られるように思われる。それに対し，疲れた都会生活者を暖かく迎え入れ，都市労働で害した健康を取り戻すための穏やかな癒しの場として，そして健康的・牧歌的な農業労働の生活の場として，

* 広島経済大学経済学部教授

Mareuil という田舎が設定されているのである。

しかし、田舎とて病いに無縁な場所ではない。ジャンヌは、パリに行って間もないアンリエットに、弟のルイが麻疹に罹り、のちに無事回復したことを知らせている。周辺で麻疹が流行り始めた矢先、ルイが頭痛と悪寒を訴えたので、マルリエ夫人はすぐ麻疹と察し、まだこれに感染したことがないジュリエットを急いで祖母の家へ送って避難させる。ジャンヌの従姉妹のマチルダが、麻疹の子どもの看病の際に自らも感染して命を落としており、マルリエ家の人々にとって、麻疹は油断できない怖ろしい病気である。ジャンヌはすでに麻疹を済ませていて感染の心配がないので、家にとどまって母親とともに病人の看護にあたることになる。病人の熱は高く、心配したマルリエ氏が医者呼びに行き、やって来たマルリエ家の主治医、ベルトラン氏は、病人の経過が順調ですでに回復しつつあるとみなを安心させ、特別な薬の処方はいらないとマルリエ夫人の看護を高く評価する。

マルリエ家での病人の手当には自家製の治療薬が用いられている。ルイの麻疹の場合にも、冬に祖母が流感に罹った際にも、さまざまなハーブを用いた茶が治療薬として登場している。病人を飽きさせないようにカキドオシ、スミレ、アオイ、ヒナゲシ、オレンジの花など異なる種類のハーブティーを、蜂蜜かカンゾウ、水煮にしたイチジク、自家製のガムシロップなどで甘味をつけて飲ませている。風邪をひいたときの特効薬は卵入りホットミルクである。夏の刈り入れ作業で雇った労働者たちが生水を飲んで体調をこわした場合も、ニワトコ茶を与えて看護している⁽¹⁾。このように、マルリエ夫人は昔ながらの知恵が教えてくれる処方通り、症状に応じて、具合の悪い者や特に回復期の病人に与える習慣を守っている。その状況は農村でも都会でもほぼ同じで、19世紀末にいたっても変わっていないようである。この書でもそうした家庭の伝統薬のレシピを紹介することに重きを置いており、女性たちが伝えてきた民間の伝統医療については肯定的である。ベルトラン医師がマルリエ夫人の措置に注意を与えたのは、長時間火にかけて濃く煮詰める煎じ茶についてだけで、これは田舎でよく用いられてはいるが、重すぎて病人に与えるにはふさわしくなく、ハーブの葉や花に熱湯を注いで蒸らすだけの軽いハーブティーの方がよいとしている。

(1) 中毒患者が多く問題となっていた阿片チンキも、重い下痢などに効くとされ、この時の治療に湿布薬として用いられている。子どもに用いてはならないとはしながらも、家庭薬として常備すべきものの筆頭に、阿片チンキは挙げられている。Piétrement, Maria, *Le bonheur au foyer domestique, livre de lecture courante pour les jeunes filles*, Paris (Garnier Frères), 1891, pp. 60, 293.

近代医学の教えを家庭に伝える立場のベルラン医師がなにより重んじるのは、清潔を保つことである。病人を暖かくしてやることは必要だが、重い布団で窒息させるようなことはやめ、部屋の換気に注意し、体を冷やすことを恐れて病室の空気を澁ませたりしてはいけない。病人の体の清潔を保つように湯で洗ってやり、下着を暖めておいてこまめに取り替える。病室の衛生と病人の体の清潔の両方を保つことが、きわめて重要なこととして強調されている。

伝染病に関しては、都市の方が農村部より危険も被害の程度も大きくなるのは当然であろう。1884年7月にパリで発生したコレラについて、アンリエットは手紙で、隣人のローラン夫人がコレラの発生を知らせた新聞を持ってエリザの所に駆け込んできたときの模様を知らせている⁽²⁾。この場面では、ニュースに怯えて混乱するローラン夫人と、それに対するエリザとアンリエット姉妹の冷静さが対照的に描かれている。伝染病の蔓延に過剰反応する人々の不安と恐怖が、よけいに災いを大きくするため、こうした場合の沈着冷静さが何より必要であることを強調するためであろう。冷静さを保つには、神の加護を信じ、予防措置を怠らずに講じることが重要であるとしている。何より大事なのは、規則正しく、過食・過飲を避ける節制した生活と、衣・食・住全般に亘る徹底した清潔への心懸けである。消毒剤、予防薬、病人の看護など実際の措置や処方箋についても、衛生学や医学の権威者の勧めがいくつか紹介されている。病気そのものは医者にししか治療できないが、伝染病の際には医者が多忙で手が足りないため、一家の主婦は必要な措置を知っておくことが望ましいのである。

衛生上の細々とした注意点を忠実に守った上で、さらに伝染病患者の看護を嫌がるそぶりを見せて病人を滅入らせないこと、不安な様子を見せないで病人を元気づけること、回復期の病人のわがままを許さないことなどなど、伝染病に打ち勝つためには、看護者としての女性には、優しさだけでなく、あらゆる面で精神的な逞しさが求められている⁽³⁾。ルイが麻疹に罹ったときにも、回復期の病人が退屈を紛らわせ、心穏やかな状態で順調に回復するように慰める天性の術に長けているのは女性

(2) パリにおけるコレラの流行は1832年より始まり、1849年、1853-54年、1865-66年の4回の大流行を続けて経験した。1万人を越える死者を出したこの4回の大流行に比べると、1884年のコレラは死者997人で、かなり規模の小さいものであった。Sellier, Jacques, *Le choléra à Paris au XIX^e siècle: essai de topographie biologique, Thèse pour le doctrat en médecine (Diplôme d'État)*, Dactylo Sorbonne, 1973.

(3) 食欲を増したコレラ回復期の病人は飲み物や食べ物を無性に欲しがすが、それに負けて看護人が食物を与えて死亡させてしまった例が紹介されている。Piétrement, Maria, *op. cit.*, pp. 229, 230.

であるとベルトラン医師は語り、その任を委されたジャンヌは、物語を聞かせたり本を読んでやったりして、辛抱強く、病床でわがまま放題のルイの世話にあたる。

エリザの二人の子どもについては、幸い病気にかかることもなくすくすくと育っている様子が描かれているが、この当時の実際の乳児の死亡率は高い。アンリエットの手紙にも、子どもの死亡率の大部分が母乳を与えられていない事により起こるとあり、エリザが子どもをもっぱら母乳で育てていることが述べられている。それも赤ん坊が泣いて欲しがらざるだけではなく、時間を定めて規則的に必要量だけやることが提唱されている。また、子どもの病気の大半は食べ物から起こるものであるとする医者⁴の忠告に従い、離乳後も軽い消化にいいものだけを与えるようにしなければならない。エリザの育児法は当時の新知識に基づくものであり、アンリエットは田舎で行われているものと異なるのに大いに驚く。エリザは育児の旧弊を否定し、医学的・科学的方法を取り入れた新しい育児法を信じる近代的な若い母親世代を代表している。たとえば、赤ん坊の頭を保護するためにいくつもボンネットをかぶせたり、分厚い布団や布でくるんだりすること——Mareuil では寒さから保護するために当たり前に行われていたのだが——をエリザはしない。赤ん坊を暑苦しくさせるのは避けるべきで、赤ん坊を寝かせるのも柔らかい羽布団や羊毛布団ではなく、安く中身の取り替えができる藁布団である。スワッドリングも、赤ん坊の発達を妨げ、障害をもたらすものとして断固否定されている。赤ん坊はいつも清潔に保たれるように、毎朝お風呂に入れて身体も髪も洗い⁽⁴⁾、おしめもいつでもすぐ取り替えられるようにたくさん用意しておく。相変わらず頻発していた、母親の体による赤ん坊の圧死についても、授乳後は必ず赤ん坊をゆりかごに移すようにし、一緒に寝かせたまま眠り込んでしまわないようにしなければならないと注意されている。

不幸にして病気に冒された場合は、近代医学に確固たる信頼を置き、主婦は病人を救いその慰めとなる看護者となり、近代医学の体現者として、そして医者⁵の補助者としての役割を務めるべきこと。そしてその前提として、衛生を阻害する生活上の誤った旧弊を斥け、生活のすべての側面において、なによりも清潔を保つこと。以上が、家族を襲う病いの危機を切り抜けるために、重要とされていることである。

病気の場合と同じく、勇気をもって危機に冷静に対処することを求められるのは、事故の場合も同じである。休日、郊外へみなで気晴らしに出かけたとき、フェリッ

(4) Mareuil などの田舎では、逆に、頭に垢のかさぶたがある子は丈夫であるとされていた。
Ibid., p. 150.

クスが自らの命の危険を顧みず、溺れた子供を川から引き上げ、沉着冷静な救急措置でその命を救ったことを、アンリエットは誇らしげにジャンヌに知らせている。そのジャンヌを襲った最も恐ろしい災難は、妹ジュリエットの火傷の事故である。家族全員が忙しく家の外で仕事をしていた時、家の中に一人でいたジュリエットは暖炉の上のハーブの束を片づけようとして、薪の火が服に燃え移ったのも知らず、たちまち炎に取り巻かれてしまう。幸い、叫び声でいち早く駆けつけたマルリエ氏が、毛布でジュリエットをくるんで床に転がし火を消し止めたので一命をとりとめることができたが、ジュリエットはひどい火傷を負い、ジャンヌ自身も恐ろしさに体が震えて咄嗟に動くことができない。父親は、こうした非常時こそ感情を制御して冷静に必要な行動をとれることが大事だとジャンヌに諭し、ジャンヌは、娘の恐ろしい事故に大きな衝撃を受けながらも冷静に対処する母を手伝って、妹の服を慎重に脱がせ火傷の手当をする。バルトラン医師が駆けつけ、火傷がそれほど重傷ではないと診断してみなをひとまず安心させる。当時、暖炉の火が女性の広がったスカートに燃え移る事故はよく起こることであり、あわてて逃げ出したりしてかえって被害を大きくしてしまうことがあったのである。

ジャンヌは、父が出会った若者たちの起こした事故についても伝えている。鉄道線路を越える時、通り過ぎる汽車に怯える馬が暴れて溝に落ち、馬車はめちゃくちゃになり、馬は瀕死の状態、乗っていた若者二人も重傷を負ったのである。ジャンヌの父は市場に行く途中にこの若者たちに出会って、その無謀な馬の扱いに注意を与えたが、若者たちはそれを聞こうともせず、乱暴な運転を続け、挙げ句、ジャンヌの父は市場からの帰途、倒れている若者たちを発見したというわけである。ジャンヌの父は向こう見ずな若者たちの応急手当をして、親切にも医者を呼びに行ってやる。命を失うまでにはいたらなかったが、肉体的な傷も（全治6週間）、経済的な傷も（借りた馬車と馬の補償）少なからぬものであり、軽率さや乱暴な行為の代償の大きさが強調されている。

生活の危機管理

病気や事故以外の思わぬ出来事が生活の基盤を揺るがすこともある。アンリエットたちが転居を迫られたのは、家主側の一方的な都合と責任によるものだったので、費用の心配はせずにすみ、生活の危機を招くほどの事態とはならなかったが、家探しの苦労や面倒な引っ越し作業は、まさに『三度の引っ越しは一度の火事と同じ』ということわざが物語る通り、生活の大混乱を引き起こすものであったことは確かである。条件に合う家をやっと探し当てても、荷作りや大事な家財を傷つけずに運

ぶことに神経をすり減らして、引っ越し当日の疲労は最大になる。新居の状態が落ち着き、元通りの秩序が回復するまで、まだまだ心配や苦労が続くのである。エリザやリュシアンの手助けがなければ、アンリエットの手にも余る事態になっていたことだろう。何もかも一度に片づけようと焦るアンリエットに、エリザは一つ一つ急がずに手順よく整理すれば、いつかはすべてうまく片づくものだと安心させる。

失業は労働者家族にとって最大の生活危機の一つであろう。アンリエットにとっても、病気のため父が仕事を続けられなくなったことは、予期せぬ事態であり、結局、父の代わりに自分が働くという慣れない苦労を背負うことになる。ただ、アンリエット一家がそれほど悲壮にならずにすんだのは、父が万が一のときのために、労働者のための相互扶助組合に加入していて、病気の治療費や失業の補償を得ることができるという安心感があったからである。相互扶助組合の起源は古く、各地、各職種で創設されていたが、その活動は長く法的に押さえられており、19世紀後半にようやく自由化が進み、数を増し活発なものとなっていく。19世紀末には、成人男子だけでなく、未成年者や女性も自由に加入することができ、病気に罹ったときや事故にあったとき、失業時、年老いた際の生活の頼りなど、様々な保障を与えてくれる制度として成長を続ける⁽⁵⁾。相互扶助組合への加入が、他に保障のないこの頃の労働者の生活安定にとっては欠かせぬものであること、そしてそのためには、日頃から家計をやりくりして経常的に組合費を支払うことが必要であることを、家族の生活を考える立場にある主婦が、率先して認識しなければならないとこの書は強調している。日常性の管理が生活危機管理に結びついているのである。

日常性に潜む危機の種として何より、主婦にとって最も警戒しなければならないものの一つが、その生涯の伴侶の生活行動であった。当時の労働者の生活習慣はしばしばブルジョワジーの攻撃の的になっている。そこで描き出されるのは、家庭に居着かず、酒や煙草、賭事に溺れ、健康を害し、仕事をさぼって首になり、家族を路頭に迷わせる生活破壊者の姿である。そのイメージは多分に画一的なものであるとはいえ、19世紀の労働者にとって、目の前に立ちただかる社会格差と経済格差は絶望的なものであったことは確かである。エリザの夫リュシアンは酒で憂さを晴らす男たちの気持ちを次のように代弁している。

——大部分の男が酒を飲むのは意気消沈してしまってそれを酔いに紛らわせたいからだよ。『一週間に40スー節約したって、何の役に立つって言うんだい？

(5) Gourdin, André, *Les sociétés de secours mutuels*, Paris (Imprimerie Paul Dupont), 1920.

それっぽちじゃ金持ちにはなれやしないさ』ってね。⁽⁶⁾

従って、家庭生活の危機を引き起こさないための主婦の手だては、生活に希望を見出せない夫を、居酒屋から、アルコールから、煙草から、その他あらゆる浪費と怠惰の原因から遠ざけ、家庭生活や家族の幸せに関心を向けさせること、そして、家庭に居心地のよい居場所をつくって落ち着かせることであった。

エリザはリュシアン⁽⁷⁾の喫煙をやめさせるため、医者⁽⁷⁾の警告する様々な煙草のもたらす健康への弊害についてだけでなく、家計への経済的影響を夫に訴える。一日にリュシアンが吸う煙草はたった4スーだが、一年ではこれが73フランになる。これを毎年貯蓄に回して35年後の60歳になった時、4%の複利で利息がついた場合で約5,591フラン、5%の利息がついた場合で約6,922フランの財産に殖えることになる。老後の生活保障が煙草を断念することで十分可能になるのである。リュシアンはこの説得に負けて、きっぱりとではないが、ほとんど煙草を吸わなくなり、エリザのもくろみは成功する。煙草代を儉約して老後のための貯蓄を増やす。酒屋の支払いを減らして万が一のための社会保険をかける。エリザの考えでは、そうした家庭経済の危機管理を主導するのは主婦であるべきなのである。

——だって女性は、主婦の権限で、つまり会計係として、家庭の支出を調整する責任があるのですもの。こうした保険に必要なお金を毎月貯金するのは、主婦にはたやすいことだわ。自分の妻がまったく何も欠かすことなくささやかな貯金までしているのを夫が見たら、夫は自分が財産を増やそうとしなかったのを恥じて、無駄な支出をやめることでしょ⁽⁸⁾う。

辛抱強く賢明なエリザは決して夫を非難することなく、いつもよい聞き手、話し相手となり、優しさ⁽⁸⁾と忍耐で自分の思いを遂げることに成功する。短気で皮肉屋だったリュシアン⁽⁸⁾の性格は徐々に改められ、外へ遊びに出かけることも減り、身だしなみよく美味しい料理をつくっていつもにこやかに迎えてくれる妻と愛しい子どもたちが待つ家庭の団欒を楽しみに、帰宅を急ぐ毎日を送るようになる。夫の心を家

(6) *Ibid.*, p. 326, 327.

(7) エリザは、煙草の濫用は歯を損ない、胃や肺の病気の原因となり、記憶力と知性の減退を招き、その他もろもろの弊害のもとであるという医者⁽⁷⁾の意見を紹介している。たとえば、喫煙者は気分転換に酒を飲まざるをえなくなり、大部分の者が同時に酒飲みになるとされた。*Ibid.*, p. 118.

(8) *Ibid.*, p. 326.

族につながり止め、生活を共に築くよき協力者となし、平和な家庭を守っていくことが、主婦にとって欠かせない生活の危機管理とされたのである。

4. 主婦の労働と経済

消費管理者としての主婦

アンリエットは毎週、父親から家事に必要な金を受け取りそれで一週間の家計のやりくりをする。受け取った金額の範囲内に出費を収めるのは、アンリエットの才覚にかかっている。節約の努力は、余った残額を自分の貯金にできるということで報われるのである。アンリエットは、エリザに買い物の仕方や店の場所を教わり、パリでの買い物にもほどなく慣れて、子どもを抱えたエリザのための買い物も引き受けるようになる。買い忘れのないように、支出帳に必要なものをすべて書き出し、帰ってきたら値段をそこに書き加え、何度も計算し直して残額を確かめておくことを怠らない。

アンリエットが残金の確認に慎重なのは、パリに来た早々、予算を超えて金を使い過ぎる失敗を犯したからである。はしりの高価なアスパラガスを買って、週の終わりもまだ来ないのに、財布を空にしてしまったのだ。父に大好物を食べさせたいという誘惑に思わず負けてしまったためである。アンリエットは自分の失策を隠すため、いつも買うパン屋の払いをつけにしてもらうことも考えるが、それは良くないことと思い改めて、父に正直に金の使い過ぎを告白し、必ず節約して返すからと約束して、足りない分の金を渡してくれるよう頼むことにする。このような失敗を経て、アンリエットは節約にさらに励み、毎週2-3フランの金を残すことができるようになる。

まず、家賃や被服費などの大きな出費はあらかじめ必要額を毎週の収入から取りのけておき、支払いの時にあわてなくて済むように心がけておく。

日常の買い物については、細々した出費をいかに合理的に節約するかが大事である。都会の人々の買い物の仕方に対してアンリエットは批判的である。昼食に使うバターを4スーフンだけとか、塩2スーフンと4分の1束のヴァーミセリだけとか、サラダに用いる調味料をお皿を持って買いに行くとか、食事の度に必要分を少量しか買わないパリ市民の買い方を不経済だと感じている。

——あまりたびたび煩わされると、商人は高い値段で売らざるをえなくなると思わない？自分の家で、サラダの量や他のお料理に応じて自分流に味つけをすることなんか考えないのね。でも、そのための時間のロスを考えてみてちょ

うだい。⁽⁹⁾

欲しい物が毎日必要なだけ手に入る都会の生活においても、消費には長期的計画性を持つことが大切である。そしてそれはわずかでも確実な節約につながる。保存のきく食料品はアンリエットはまとまった量を安く買うことにしている。砂糖やチョコレートなどは1kgで1スーの値引きがあるのだ。

——少しのことだけれど、この出費が毎日積み重なると、最後にはかなりの節約を生むことになるのです。『小川が大きな河になるのよ』とエリザはいつも言います。1日6スーの節約は1年に100フラン以上になるの。もし注意していなければ、1日6スー以上使ってしまうのは簡単でしょう。⁽¹⁰⁾

生鮮食品については、野菜、バター、卵は週2回、栽培農家が街角に開く市で2-3日分を買い、肉や魚は保存の手だてのないアパルトマンではすぐ傷んでしまうので、毎日鮮度のよいものを買う。野菜は、アスパラガスの苦い経験を生かして、あらかじめ何を買うか決めておかないで、市場でひと渡り見て回ってから、出盛りの最も安いものを買うようにし、遠方から運んでくる果物などはすでに新鮮ではないので、高くなくてもたくさん買うことはしない。食品の保存・衛生状態と経済性の兼ね合いを十分考慮して購入することが、理想的な主婦には求められるのだ。献立を考える際も、考慮するのは経済と健康の二点である。舌平目のフライは一品だけで2人分15スーもかかってしまうが、卵料理とサラダなら合わせて8スーで済み、栄養的にもより優っているとされている。

こうした日常の細々とした節約の工夫が家政を取り仕切る主婦の肝要な役割であること、そしてそれを怠る主婦がいかに家計を破壊する浪費家であるかについては、この書のなかで繰り返し場面を変えて強調されていることである。ジャンヌは近況報告の手紙の中で、隣家のロベール兄弟の対照的な生活状況を語っているが、これなどはその顕著な例であろう。

兄弟の一方のジュールは稼ぎの良い労働者だが、妻は家事も家計のやりくりもできないため、週末になると財布はいつも空っぽである。パン屋のつけが溜まったあげく、家の登記書まで差し押さえられており、栄養状態の悪い6人の子供は、服も靴も破れてみじめな様子で、年嵩の子どもたちも無気力で働こうとしない。夫は愛

(9) *Ibid.*, p. 64.

(10) *Ibid.*, p. 64.

想を尽かして家庭に居着かず、居酒屋で酒や賭事にふけて一晩で給料を使い果たすありさまである。兄弟のもう一方のエルネストの方は、妻は洗濯女で働き者である。7人の子どもがいるが、夫も子供もちゃんとしたものを食べ、ちゃんとしたものを着て、ささやかながら貯金までしている。母親を中心に、一家が1スーも無駄にすることなく、すべてのものを利用して節約に励んでいるからである。節約したお金で小さな畑を買い、飼料を栽培して家畜を飼い、その利益で家計を助けている。

出発点が同じで収入も異なるのに、結果に大きな境遇の隔たりが起こるといふこの兄弟の話は、生活の質が何より主婦の家政いかんによって決まること、従って、いかに主婦の責任が重大であるかという教えを強調するためのものにほかならない。

——妻だけで大変な違いです。一方は家に繁栄をもたらし、他方は崩壊を引き起こしています。だから、家を作るのも壊すのも妻であるって言われるのね。『節約のないところに』とおばあちゃんが言ってるわ。『大きな幸せは決して⁽¹¹⁾ない。節約のあるところに幸せが小さすぎることは決してない』って。

ジャンヌは手紙でこのように書いて、未来の家族の幸せに対して担う自身の責任の大きさを痛感するのである。しかし、そうした日常の煩瑣な節約がもたらしてくれる幸せは、ほんとうに「小さすぎること」はなかったのだろうか。アンリエットの父親はこう述べている。

——賢くて先見の明がある母親に育てられた女性は、所帯を持つときに、2フランの節約は金持ちになるためではなくてゆとりを持つためだっていうことを夫にわからせることができる⁽¹²⁾だろう。

自分の労働と自分の時間以外に何もかも生活の手段を持たない労働者家庭では、ささやかなゆとり、これを感じるために、日々の節約が欠かせぬものであった。そのゆとりは、家計を任せ、消費を管理する主婦が、限られた収入の中からつくり出して、夫や家族に与えなければならないのである。そしてもしその義務を主婦が怠れば、前節で述べたように、すぐさま転落の淵に沈む危機が待ちかまえている。さ

(11) *Ibid.*, p. 307.

(12) *Ibid.*, p. 327.

さやかなゆとりと生活危機は背中合わせの状態が存在していたのである。生活を取り巻くさまざまな危機をよく承知して、日常の細々とした節約に励み、それが老後や病気・事故の際の生活保障につながるように、今日明日のことだけでなく、遠い将来の家族の人生設計を常に考えておかねばならない。女性に課せられた経済的使命はきわめて厳しく難しいものであったと言える。

このように、労働者家庭においては、主婦の家庭における経済的実権が、消費の管理者としての範囲に留まらず、どのように生活を、そして人生を築くかという家族の長期的経済戦略の範囲にまで及ぶことが、必然的となり、またそれが理想的であると考えられていたのである。このことは、経済との関わりを着実に増す方向へ女性の進路を向けることに寄与したと考えてよいだろう。

労働者としての主婦

アンリエットとジャンヌの主婦修業は、家事のノウハウを覚え、日常の消費を管理するという、家庭内での主婦としての仕事に範囲をとどめず、家計を支えるための労働、生計を立てるための労働にも及んでいる。とりわけアンリエットにとっては、父が病に倒れたため、働いて収入を得ることは、単なる修業を越えた現実の問題となった。

アンリエットは病気のため仕事を禁じられ苛立つ父を助けるために、勤めに出ることを決意する。父は、主婦修業に励むアンリエットを家の外の世界へ出すことのためらいを覚え、蓄えもあるからと娘を家に止めようとする。しかし、その蓄えは、他ならぬそのアンリエットの結婚持参金のための大事な蓄えであったので、父はそれを使って減らしてしまうことにも容易に踏み切れずにいた。父の心中を察したアンリエットは、次のように反論して父を説得する。

——外で暮らしの糧を稼がざるをえないたくさんの女性がしていることがどうして私にできないことがあるかしら？⁽¹³⁾

娘の力と勇気を信じる父はもはや反対しなかった。こうしてアンリエットは、エリザが内職を引き受け、アンリエット自身も時おりそれを手伝っていた店のアトリエに雇われることになり、毎日職場へ通うことになる。家庭から隔てられた労働の場に新たに身を置くことになったアンリエットを中心に、この書で労働者としての女

(13) *Ibid.*, p. 323.

性がどのように描かれているか、ここで検討してみよう。

職場での労働について、最初にアンリエットが感じたことは、一日中アトリエでじっと座って作業することへの違和感であった。自分の意志のままにこまめに家の内外を動き回る家事仕事との勝手の違いに戸惑い、自由を奪われる束縛感をジャンヌに書きつづっている。女性に本来ふさわしい「自由な」家庭労働と、時間と自由を束縛された「不自由な」家庭外での労働という図式がここで明示されている。

アンリエットは、多くの労働する女性たちが実際に行っているように、仕事と家庭の両立をやり遂げようと奮闘する。エリザが食事を支度してあげようと助け舟を出しても、アンリエットは自分の力を試してみたいときっぱりと断る。労働時間は、朝10時から夜7時まで、昼の1時間の休憩をはさんで8時間と決められているので、朝、勤めに出かける前に掃除と買い物、昼食の準備を済ませてしまう。ちょうど昼頃にできあがるように少量の石炭を入れたストーブに料理の鍋を掛けておくこともある。これは勤めを持った忙しい女性の調理法としてエリザが教えてくれた方法である。昼の1時間の休憩は仕事場との15分の往復時間を除くと、45分しか残っていない。7時に仕事を終えた後は、8時までに夕食の準備をしなければならない。夕食後は洗濯、アイロン掛け、服の繕いなどがたまっている。日の出が早い時期は、朝4時に起きてこうした家事を片づけ、夜の時間はできるだけゆっくり休むようにする。少々辛いことがあっても、心配をかけるので父に愚痴はこぼさない。可愛い甥や姪との時間も十分持てなくなったアンリエットにとって、日曜日に家族と過ごす憩いのひとときが唯一の楽しみである。

このように、アンリエットは健気に一人前の働く女性としての道を歩み始める。父はのちに Mareuil への帰郷を思案する際、自活できるようになったアンリエットについて、田舎に帰るよりもこのままパリに留まり、自由に生きていく方が幸せなのではないかと考えるようになる。しかし、外へ働きに出ることを病気の父のためにと決心した親思いのアンリエットは、その仕事を捨て都会生活とも別れを告げて、父とともに帰郷することをためらわずに決意するのである。この結末には、家族愛称揚の意識とともに、都市の労働、特に女性の家庭外での労働に対する著者の疑念が暗に示されていると言えるのではないか。アンリエットの労働は、愛する父のためという目的ゆえに肯定されるのであり、自身が自活する目的だけでは存続の意味を失うのである。女性の労働と家族、この二つの要素は、この書で離れがたいものとして取り上げられている。たとえば、女性労働のあり方について、姉妹の間で次のような会話が交わされている。

——でも、工場で働いている女の人は沢山いるわ。その人達はどうすればいいの？

——子供がいない場合は、まだいいわ。どうにかできるでしょうよ。でも、パパや私の夫はそれでは困るでしょうよ。食事の支度が当然おろそかになるもの。それに、出費がずっとかさむわ。一番安い食料をさがす時間もなくなるし、特に一番早く料理できるものを買わなくてはいけないもの。

——じゃあ、工場で3フラン稼ぐより、自分の家で2フラン稼ぐ方がいいってこと？

——私はそう思うわ。⁽¹⁴⁾

主婦の労働は、家事をおろそかにし、家族に不便をかけ、場合によっては出費超になって経済的損失をもたらすというマイナス面をここでエリザは挙げている。主婦にとって最も望ましい労働の形は、家事に目を配りながら家庭で行うことができる仕事であり、エリザが内職のレース修繕工に甘んじているのはそのためである。しかし、その仕事は決して安定しているわけではない。夏場、金持ちが都会を離れて田舎暮らしをする時期には、レース修繕の仕事はぱったりと途絶えてしまう。もっともそれは、賢明なエリザにとって予想しうる事態であり、『弓に何本かの弦は必要』と、エリザはミシンで下着を作る仕事でその間の家計不足を補うのである。⁽¹⁵⁾

収入の低さや不安定さにもかかわらず、労働のために主婦が家庭を離れるのは避けるべきだとする最大の理由は、子どもである。子どもを家庭に置き去りにして働きに出ることは、子どもの死につながる悲惨な行為であり、都市の子どもの高い死亡率をもたらす原因としてエリザは強く非難している。⁽¹⁶⁾ しかも、労働者家庭のため

(14) *Ibid.*, p. 55.

(15) 当時、現実の女性労働者の賃金については、フルタイムで働く工場労働者と家庭で内職をする労働者ではかなりの隔りがあった。Leroy-Beaulieu の報告によれば、家庭で内職する労働者は工場労働者に比べて少なくとも3分の1か2分の1、場合によっては4分の3も平均賃金が低く、仕事の仲介人などによりさらに賃金を差し引かれ、1日1フランに満たない賃金しか受け取れないことも珍しくなかった。さらにその賃金差は19世紀末に向けて開いていく傾向にあったという。エリザがレースの内職で1日2フラン受け取っていたとすれば、それはきわめて熟練した技術を持っていたことを意味する。Leroy-Beaulieu, Paul, *Le travail des femmes au XIX^e siècle*, Paris 1873, pp. 80-89.

(16) 農村部より都市で、そして特に都市の中でも工場を多く擁する都市で、また、ブルジョワジーより労働者階級の家庭で、子どもの死亡率は高くなっている。つまり家庭を離れて働く母親が子どもを母乳で育てられないという社会的要因が子どもの高い死亡率のもとと

に子供を預かってくれる託児所は、まだ都市でも数が少ないため⁽¹⁷⁾、結局、子どもを大切に思うなら、母親が外で働くことをあきらめて家で仕事をするしか現実的な手だてが残されていない。このように結論づけながらも、エリザは、隣のローラン夫人が仕事や買い物で外出しなければならないときは、二人の子どもをこころよく預かってやることにしている。労働者同士は、お金によるのではなく、自分たち自身に善意を施すことによって助け合うことができるというのが、エリザの持論である。

このように、著者は、女性労働を、家族のあり方と不可分なものとして、それに従属したものとして捉える一方で、生活するためには女性も労働せざるをえない労働者家庭の現実の問題にも目を向けている。しかし、ブルジョワジーが理想とするような主婦が常に家政に目配りできる円滑な家庭生活と、労働者階級にとっては実際の必要に迫られていた家庭外での女性労働とは、両立がきわめて困難な状況であったがゆえに、そこに実際の解決法を提示するには至っていない。当時、高い乳幼児死亡率をもたらす人口減に危機感を抱くブルジョワジーの中において、乳幼児を抱えた労働者女性のために託児所をもっと設置すべきであるとか、逆に、労働者女性が家庭に留まって育児に専念できるよう、補助金や内職仕事を与えるべきであるとか、それぞれの立場に立つ議論がまさに巻き起こってきたところであった⁽¹⁸⁾。生活のための労働と家庭、いずれを重く見るべきか、著者の立場も揺れ動いているが、結局はブルジョワジーの価値観を優位に置いた言説の方に傾いているように思われる。それは、次の労働を仲立ちとした社会関係の問題にも共通するところである。

アトリエには、女主人のもと、監督の女性一人とアンリエットと労働者の女性4人——もの悲しげな寡婦が一人、見習期間を終えたばかりのおとなしい若い娘が二人、そして両親の家から通っているおしゃべりな娘ロール——が働いている。店からアトリエにもたらされる仕事を、監督がアンリエットたちに割り当てるので、それを次々とこなしていかなければならない。アンリエットは任された仕事を注意深

なっているのである。Deswatre, René, *Les crèches, leur passé, leur présent, leur avenir, étude d'hygiène sociale, Thèse pour le doctat en Médecine, Paris (Imprimerie de Facultés), 1906, pp. 7-16.*

(17) フランスでは1844年、最初の託児所が Jean-Baptiste Firmin Marbeau によって創設され、労働者たちに歓迎された。しかし、託児所数の増加はその後さほど進まず、パリでは1884年になっても全体で34にとどまり、まったく託児所のない区も存在した。Ibid., pp. 63-69.

(18) Fontès, (le Docteur), *Des secours à accorder aux femmes nécessiteuses qui voudront allaiter leurs enfants, Rapport adresse à M. le Maire du 1^{er} arrondissement, Extrait du Bulletin de la Société protectrice de l'Enfance, Juillet-Août 1873.*

く行い、誠実な労働者として振る舞うことを心がける。横柄な監督に対しても特に不満は述べない。女主人のマダム・アルマンは穏やかなよい人で、彼女を喜ばせるために苦勞することは誰もいとわない、とアンリエットは書いている。

この書における、雇用主と雇用者の関係、すなわちブルジョワジーと労働者の関係の描き方は、きわめて明確な特徴を持っている。まず、そのどちらもが女性であり、女性の労働の場では上下関係も女性によってのみ形成されている。

アンリエットのアトリエは女性だけの職場である。アンリエットを含む勤勉で忠実な労働者たちに対峙しているのは、同僚のロールで、目先の楽しみのみを追いかけ、休み明けにはしばしば欠勤し、手にした金はあるだけ楽しみのために使ってしまう娘である。放蕩生活がたたって肺病に冒されており、よけいに刹那的な楽しみしか目に入らなくなっている。また、他の労働者の例として、アンリエットが市場の買い物で知り合ったセシルとルーズという二人の女中が挙げられている。公証人の家で女中をしているセシルは気だてがよく、几帳面で清潔で、注意深く正直な娘として描かれ、またその女主人もセシルに仕事を丁寧に教え、思いやりがあり、セシルは「お仕えするのが嬉しい」という言葉通り、パリに出てきて4年間、ずっと同じ家で働いている。一方のルーズは、時間にルーズで掃除が苦手、夜遊び好きときているから、半年と同じ家に居着くことができず、女主人に対する不平をいつも並べている。

労働者についてはこのように完璧な模範例とその極端な反対例を挙げる一方で、ブルジョワジー女性の描き方はきわめて画一的である。『力より優しさの方が多くのもを得る』という言葉通り、雇い人の好意的忠勤に包まれるアトリエの女主人マダム・ローラン。そして、セシルの女主人についても、社会奉仕を理想とし、静穏な暮らしを求めるものの、夫の社会的体面を保つため、意に染まぬ社交生活に明け暮れねばならず、多忙をきわめる中で、家事を取り仕切り、子供の教育に熱意を注ぎ、週に2時間は貧民や病人の訪問を欠かさず行い、女中が病気の時には家族の一員として看病するという絵に描いたような名流夫人として描かれている。

無為に過ごす裕福な有閑階級女性のイメージはひとかけらも出されていない。もちろんブルジョワジーの女性に対するそのような批判があることも承知の上で、その批判を受けて弁護しているのが労働者であるエリザである。

——肉体労働をしていなくても、まじめで役に立つ女性は存在するのよ。セシルの女主人は、幸せなことに例外ではないわ。浅はかなことに時間をすべて費やしている女性は考えられているより少ないわ。もし彼女たちに尋ねること

ができれば、ぶらぶらした暇な生活が彼女たちの心に満足を与えるどころではないことがわかりだ⁽¹⁹⁾と思うわ。

エリザの隣人ローラン夫人は当時の労働者がおそらく胸に抱いていたであろう意見を開陳している。なぜ、私はあの人たちのように金持ちになれないの？あの人たちと交代できないの？エリザは慎ましやかに返答をしている。それが神の思し召し。労働者が金持ちになりたいなどと途方もない考えを抱くのが、そもそもの不幸のもとなのだ。財産を持っている金持ちより、何もない労働者の方が悩みが少なくてむしろ幸せなのだ。仕事を、そしてお金を与えてくれる金持ちが存在することを感謝して、自分の居場所に満足しなければならない。

階級差や経済的格差という、社会的秩序を乱しかねない当時におけるきわめてデリケートな問題を、家庭を守る使命を持った同じ女性であるという連帯感を用いて和らげた後、それぞれの置かれた境遇の差を明確にし、必然のものとしているのである。ブルジョワジーの存在を、それが与えてくれるものを、そして自らの境遇を、そのまま素直に受け入れて、ブルジョワジーの抱える問題にまで理解を示してくれる、そういうブルジョワジー側から見た理想の労働者像が呈示されているのである。

——いいえ、私の主人は完璧ではないわ。完璧なんてこの世にはないわ。私に欠点があるように、あの人たちにも欠点があるわ。でも、私たちはお互いに我慢し合っているのよ。私は自分の務めをちゃんと果たして、私を使ってくれる人たちを満足させようと努めているのよ。…一言で言えばね、私は主人たちが好きだし、あの人たちも私を大切に思ってくれていると思うの。だから、どうして私があの人たちのことで不平を言えるでしょう？自分にお金を支払ってくれる人のことを軽蔑する癖のある使用人もいるけど、私は嫌だわ。もしその家で嫌だと思ったら、そこに居るべきではないわ。⁽²⁰⁾

完璧な女主人に仕える完璧な労働者であるセシルの言葉である。

農場経営者としての主婦

家禽小屋の世話から出発した農場でのジャンヌの仕事は文字通り大きく羽を広げ

(19) Piétrement, Maria, *op. cit.*, p. 272.

(20) *Ibid.*, p. 263.

ることになる。家禽小屋では、ジャンヌの丹精こめた仕事の成果として、鶏、鴨、鶯鳥、あひる、七面鳥、鳩がその数を着実に増し、鳥の肉、卵、羽根を売った利益がたくさん得られるようになる。

生産の場である農場では、家政における消費の管理と同じように節約を心がけるだけでは成り立たない。十分な節約努力をした上で、いかに収益を生み出すかを考えなければいけない。ジャンヌに農家の家政の手ほどきをするのは母親であるが、こと農場に関わる部分になると、母親だけではなく父親のアドヴァイスの役割も大きくなる点が注目される。父はジャンヌに言う。

——人はただ節約するだけでは生きていけないからね。特に農場では、財産を殖やすために、そしてそれぞれのものが与えてくれる利益をすべて引き出すために、何事もおろそかにしてはならないんだよ。⁽²¹⁾

利益を得ることの大切さと喜びを知るために、マルリエ氏は子どもたちの労働が農場の利益に貢献した場合、その働きに応じて利益の一部を与え、貯金させている。

ジャンヌという働き手を得て、また、近く除隊して帰ってくるフェリックスの労働も期待して、マルリエ家では、農場生産の増産を着実に進めようとする。家の改築で住生活の改善を図るだけではなく、農場設備の改善も徐々に行われていく様子がジャンヌの手紙に折々報告されている。家禽小屋の鳥たちを泳がせるための貯水池を庭に作り、家畜小屋や酪農場との行き来がしやすいように煉瓦の舗道を中庭に作る。庭の奥に養蜂舎を新たに設け、果樹園を拡大し、兎小屋を広く整える。こうした改善計画をマルリエ氏は慎重に一つ一つ計算しながら、どの設備に投資すれば十分利益が引き出せるものかを熟考し、必要とあれば大きな出費も決断する。

農場経営での夫婦の役割分担は明確に語られていないが、マルリエ夫人が大きな役割を果たしているのは明らかである。家内を取り仕切る、という農家の主婦の仕事には、農場に関することが、その経済的管理も含めて多く含まれているのである。ジャンヌは農家の仕事をよく知るようになるにつけ、次のような感想を記している。

——これこそ、特に主婦の技術 (*la science de la ménagère*) なのです。だって、家も、家禽小屋も、家内のもの一切をとり仕切るのは主婦なんですからね。それに対して、男の人は特に外のこと、畑のことや収穫の売却を引き受けて

(21) *Ibid.*, p. 219.

いるのです。私たちが小さい間は、ママにはたくさんすることがあったのです。私たちを育て、家畜や鶏の世話をし、掃除や料理をする。おばあちゃんの助けがあったとしても、どうやってママがすべてのことをやりおおせたのか私にはわかりません。⁽²²⁾

マルリエ夫人のポリシーは、まず、手間のかけがいのある品質のよいものを作り、最大の利益を上げるといふものである。そして、同じ手間がかかるなら、少なくより多く、小さいものより大きいものを育てるのである。最上の質の野菜や果物などの作物、家禽類などを、手間を惜しまず丁寧に育て、普通より高い値段で売る。質の良い物を求める顧客の支持を得ることを目標としているのである。マルリエ夫人とジャンヌは毎週、市場にバター、卵、チーズ、果物や野菜、鳥、兎を運んで売りに行く。手塩にかけた、品質にごまかしのない農産物は少々高くてもよく売れるのである。

——出かける時、私たちの荷馬車は一杯です。そして帰ってくる時、財布が一杯になっているのは請け合うことよ。⁽²³⁾

ジャンヌは、市場を観察しながら歩き、商人がどのように品物売り買いするか、百戦錬磨の商人に騙されないように、いかに品物の品質を見抜くかを学ぶ。また、どのようなものが市場で買い手から好まれ、求められているかについての情報を収集することも怠らない。夏場、市場には良質のクリームチーズが品不足で、持ち込まれる品が高い値段でもすぐ売り切れてしまうことを見て取ったジャンヌは、早速、来年から品質のいい小ぶりのムールを作る計画を立てる。良質のクリームは農場に事欠かないので、かなりの収益を挙げることは確実である。

兵役から帰ってきたフェリックスは4年の不在の間に改良された農場の様子に感嘆し、果樹園の世話と果物の出荷に奮闘する妹のために、果物の保存と出荷を容易にするための持ち運び用の果物保存箱を作ってやる。箱は果物のサイズに合わせてあるのできっちりと詰めることができ、さらに積み重ねて置いておけるので、狭いスペースでも沢山の果物が保存できる。フェリックスはそれをバリエで目にしたのだ。果物の保存場所と市場に持っていく品物の梱包作業の問題がこれで解決し、ジャン

(22) *Ibid.*, p. 219.

(23) *Ibid.*, p. 246.

ヌは良好な状態に保存された果物を大量に市場に運ぶことができるようになる。

ジャンヌは農家の主婦修行のさらなるステップとして、農場の会計帳簿をつける方法を教わることとなる。家計簿だけではなく、農場のすべての経費と収入を記録する元帳 (un grand livre) のつけ方である。よき農婦は農場のものについてはすべてが何をもたらししてくれるかを正確に知っておかなくてはならないからである。

元帳は開いた一方のページに支出、もう一方のページに収入を記録するようになっており、さらに収支の各項目ごとにページが分かれている。畑に関する項目のページには、支出として、肥料、種、雇っている刈り入れ人や労働者の仕事への支払いを、収入として、収穫された物すべてを記録する。農場で人や家畜が自家消費する分も、売却したものとして見積もって記入する。家畜に関する項目では、家畜の餌、麦藁や干し草などを支出として記入し、売却した家畜や酪農製品を収入として記入する。畑の肥料となる堆肥も、家畜がもたらししてくれた収入としてここに含まれる。ジャンヌの担当の家禽小屋についても家畜と同様で、市場で売った鶏や卵が収入となる。菜園、果樹園についても割り当てられたページがあり、さらに、農場の維持に関する費用を記入するページがある。ここには、建物の修理費、税金、保険、耕作道具類の費用などが記入されることになる。そして最後に家計の支出を書くページがある。ここは、食物費、衣服費、暖房費などに分かれている。ジャンヌは小さな手帳に毎日の食物出費を書き留めておいて、毎週その合計を元帳に書き込む。慣れてくれば帳簿をつけるのに、それほど手間はかからない。毎日の手帳への覚え書きはちょっとした時間で間に合い、元帳の記入も毎週15分ほどで済ませることができるようになる。

他の産業会計と同じく、農業会計の目的が利益の追求にあることは明確である。ここでは節約だけでは意味を成さない。家計の管理に求められた節約・貯蓄の経済性から利益を生み出すための経済性への発展が必要である。利益を生み出さない節約は単なる吝嗇でしかない。マルリエ夫人は娘にこう述べている。

——もし賢く使われなければ、節約することは善行でも美德でもないわ。経済的であることとは、できるだけ少なくお金を使うことだって考える人もいるけど、そう思うのは間違いよ。もしお金を使うのが有益だったら、つまり、多少とも利益を生むはずのものであれば、そうしなくてはね。もちろんそうできる時には、⁽²⁴⁾ だけれど。

(24) *Ibid.*, p. 275.

何がどのような支出を必要とし、どれだけの利益を生み出すのかを可能な限り正確に見極めるためには、会計帳簿は必要不可欠である。畑に堆肥を施したり土壌改良を行ったり、排水のための工事をしたりというかなりの費用を伴う出費も、年度末の毎年の決算でそれが報われるものであったかどうか、年を追って効果を上げているかどうかが明らかになる。全体のバランスをよく検討して、効果に見合わない大きすぎる支出は、次年度見直しをしていくことも大切である。

——経済の真の原理を私たちに教えてくれ、大きな家にも慎ましやかな所帯にも、同じように繁栄をもたらしてくれるのは、きちんとつけられた会計があるからです。⁽²⁵⁾

その会計を管理するのが、家庭の支出を調整する責任と権限を担った主婦なのである。家庭の経済実態を正確に把握し、その生み出すものの可能性を科学的方法のもとに見極めていく、そうした能力が主婦に適正なものとして認められ、育まれていくべきものであると考えられていることは、現実の女性の経済力を伸ばす上で、大きな意味を持ったと考えてよいのではないか。たとえ、その力を発揮できるのが、生産と消費が同じ場においてきわめて密接に結びついた形で行われる農家などに限られていたとしてもである。

マルリエ一家の農場経営における新しい試みとその成功は隣人の関心を呼び、富裕な農家ボーモン家が跡取り息子シャルルの嫁としてジャンヌを選ぶ。しかしそれは、マルリエ家の増しつある富が目当てであったのではなく、たとえどのような家に置いたとしても、その才覚と勤勉さを発揮して必ずや富をもたらすに違いないジャンヌの存在、その経済的価値そのものが目当てであったからであり、女性の経済的能力が、家の経済にとってきわめて重要であると著者が信じていたことをはっきりと示すものであろう。

5. 結びにかえて

この書は主として庶民階級に属する少女の教育のための読み物として書かれ、現実そのものを描いたわけではないから、そこに感じられるブルジョワジー的な押しつけがましきのある道徳臭と、教訓のために引き合いに出されるあからさまな虚構をつつくのは不毛である。虚構の中にある現実を捉えることがなにより有益であらう。

⁽²⁵⁾ *Ibid.*, p. 278.

本稿における検討の結果、中・上流層の主婦を対象とした従来の家政書と比較して、庶民向けの家政書としての特徴が、次のようなところで明らかであると考えられる。

衣・食・住にまつわる家事、育児、家計を助ける日々の労働、生活設計…。それぞれ豊富な内容を持つ種々様々な仕事の要素が、労働者階級の女性の生活の中に詰め込まれている。中・上流層家庭と仕事の量と質はもちろん異なるのだが、家族の幸せのために主婦に求められていることは変わるわけではない。家庭に属する人と物の秩序と衛生を保ち、経済性を重んじること。これをブルジョワジーの主婦が複数の使用人を用いて行うのに対し、労働者階級の女性は基本的に人手を借りず、すべて自ら計画し、自ら遂行しなければならない。しかも、貧しく忙しい日々の労働生活を前提として、時間と金をやりくりしてやり遂げるのである。そして、それを怠れば、たちまち生活の危機を招き、貧困の暗い淵に家族全員を突き落とすことにもなるのである。この家政書は、きわめて重い責任をこうした階層の女性に背負わせるものであると言えるだろう。

特にその経済的責任は重い。庶民、労働者家庭においては、家計の経済性は、守られるべき高いモラルどころではなく、現実の厳しい生活の術であった。それを行うことができるのは、日常の家事に携わる主婦であり、主婦は、必然的に短期・長期の家庭経済を設計・管理する立場に立たされることになる。しかも、家計を支えるための女性の労働が、家庭における主婦としての義務と合致するところ（家庭への直接的経済貢献という点で）、また、相反するところ（家事をおろそかにすることによる家庭への被害という点で）、両方の側面をかかえていたために、その両面性をもたらす矛盾が、働く女性に個々の家庭の現実問題として覆い被さるとともに、従来のブルジョワジーのモラルや価値観とも整合性が保てなくなって社会問題化してきていた。すでにこの時代、女性の労働と家庭の問題が複雑な色合いを見せ始めていたことが指摘できよう。この『家庭の幸福』という家政書自身も同様の葛藤の中で書かれたものであると言える。

しかしながら、この家政書で著者は、庶民階級の女性に対して、生産の場においても消費の場においても女性と経済との関わりを積極的に肯定し、それを主婦の義務であるとともに能力を測るものともしている。こうした女性と経済との関係性の肯定は、「家庭の幸福」のため、という大義名分を持つものであったため、一方で女性を家庭により強く縛りつける可能性を孕みながらも、また一方では、家庭外の世界における女性の活動範囲を広めて外との結びつきを強めるとともに、その経済力を着実に高めていく可能性も持っていたと考えられる。19世紀の家政書の中に、今日の女性たちにつながる、逞しい庶民の女性の実像が見え隠れしているのである。